

中国大盗伝 駒田信二



中国大盗伝

二〇〇〇年四月十日 第一刷発行

著者 駒田信二（こまだ・しんじ）

発行者 菊池明郎

発行所 株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前二―五―三 ㊟ 一一―八七五五

振替〇〇一六〇―八―四一―二三

案内 ○四八―六五―一〇〇五三（サービスマスター）

装幀者 安野光雅

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社積信堂

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

© SHINJI KOMADA 2000 Printed in Japan

ISBN4-480-03556-7 C0193

ちくま文庫

中国大盗伝

駒田信二



筑摩書房

目次

檻 らんる 樓と錦——陳勝・吳広（秦）	7
鼓腹の雜胡——安祿山（唐）	43
床下 しょうか の義賊——無名氏（唐）	79
黄金の蝶——無名氏（唐）	117
美女と崑崙奴 こんろんど ——朱全忠（唐）	155
韓夫人の神様——孫神通（宋）	193

解説 色どりあざやか、六皿の名菜

田中芳樹

中国大盗伝

檻^{らん}樓と錦——陳勝・吳広（秦）

鉤おびどめを竊ぬすむ者は誅せられ
国を竊む者は諸侯となる

——『莊子』胠篋篇

雨が降っている。幾日も幾日も降りつづいている。

「よく降りやがるなあ。これじゃ、どうしようもない。徴兵官のやつらは毎日のうのうと酒ばかりくらってやがるが、おれたちは、このままでは、いったい、どういうことになるんだ……」

「うん、おれもいまそのことを考えていたところだ。たとえ、あしたにでも雨がやんだとしても、水が引かないことには出発はできん。二、三日中に水が引いたとしても、ここから漁陽までは三千里もあるというじゃないか、期日までに行きつくことは、もう、とてもできんだろうな」

話しかけたのは、農民兵の班長で、名は吳広^{ごこう}。陽夏県の貧農である。答えたほうも、同じく班長で、名は陳勝^{ちんしょう}。陽城県の日傭^{ひやう}百姓である。陳勝は背がきわだって高く、いかつい顔をしている。吳広は肥っていて背が低く、柔和な顔つきをしており、よく仲間の面倒をみるので農民兵たちのあいだに人望があつた。

秦^{しん}の二世皇帝の元年七月のことである。安徽省^{あんき}蘄^き県の大沢郷^{だいたくきやう}という村落に、各地から徴発されてきた農民兵の一隊九百名が、おりからの長雨にとじこめられていた。

このあたりは、淮河^{わいが}の支流の渦水^{かすい}と澮水^{かいすい}とはさまれた湿地帯で、二つの川のさらに支流が網の目のようにはしっているので、豪雨や長雨が降るとたちまち道が見えなくなってしまうのだった。部隊はさきをいそがなければならぬのだったが、雨がやんで道が見えてこないことには、どうしようもない。

この部隊は北方の長城付近の警備のために河北の漁陽へ送られて行く一隊で、兵士たちはみな、河南の各県から徴発されてきた、身代りに金を出すことのできない貧農たちであった。

「期日までに行きつけないとすると……」

呉広がうながすように陳勝を見ると、陳勝がいった。

「それだ。おれがいま考えていたのはそのことなんだ。これから強行軍をつづけて漁陽へたどりついたところで、そのとたんに、おれたちは打ち首だ。軍令を破って期日におくれたという罪でな。だが、徴兵官たちは無事だろう。漁陽へ着くまでのみちみち、やつらは軍用金だの何だのといって、住民からしこたま金をふんだくるだろう。そのうちのいくらかをやつらは上官たちへの賄賂につかうだろう。無事どころか、やつらはその上、大もうけをしやがるんだ。ところが、おれたち百姓はみな打ち首だ」

「まさか、みんなが打ち首になるということはなからうが、班長に選ばれたおれたちは、まあ、いのちはないだろうな」

「打ち首をまぬがれた者らでも、徒刑囚として死ぬまではたらかされるのが落ちだろうよ。なにしろ秦の法令ときたら、おれたち百姓にはむちゃくちゃにむごいんだから」

「ここで逃げだすという手もあるが、逃げてみたところで逃げきれものでもないしな……。だが、それじゃ、いつたい、おれたちはどうすればいいんだ」

「このままでは、どのみち、おれたちの生きる道はないわけだ。だが、まるつきりないというわけじゃない。どうせ死ぬものなら、どうだろう、その覚悟でやればおれたちの生きる道がひらけないとはかぎらぬと思うのだが……」

陳勝はそういつて、吳広を見つめた。

「そうか。お前の考えていることは、わかった」

と吳広はいい、

「漁陽まで行ったところで、殺されないにしても、死ぬまでの徒刑囚だ。逃げたって、逃げおせるものではない。おなじことなら……、というのだな」

そして陳勝の耳もとに口を寄せて、

「謀叛か」

といった。

陳勝が大きくうなずくと、吳広もうなずき返した。

陳勝は声をひそめていった。

「扶蘇ふそという人のことを知っているか。二世皇帝の兄だ。二世皇帝の胡亥こがいは末弟で、もともと皇帝になれる人ではなかったんだ。兄の扶蘇がなるのがあたりまえだろう。この人は立派な人で、始皇帝が非道なことをするたびに、いつも強くいさめたそう。それで始皇帝はこの人をけむたがって、北方の国境守備へ隊長にして追いやってしまったんだが、それでもやはり、死ぬときにはこの人のえらいことを思い返して、胡亥にはなく、扶蘇に位をゆずるといいのこしたのだそう。ところが宰相の趙高ちやうこうのやつがそれをにぎりつぶして扶蘇を殺してしまい、胡亥を二世皇帝にして自分の思いのままに操あやつっているというわけだ。しかし世間では、まだ扶蘇が殺されたことを知らないものだから、胡亥にかわって扶蘇が皇帝になってくれたらと願っている者がおおぜいいる」

「うん、それで……」

「おれがその扶蘇になろうというのだ」

「なに、お前が……」

「そうだ。それから、もう一人……。おれたちの国の楚その者は、あの項燕將軍こうえんが生きていてくれたらなあと、みんな思っている。項燕將軍が秦の大軍にかこまれて自害したのは、いまおれたちがいる、この蕲県でだ。だが、楚の人たちのあいだには、項燕將軍はじつは生きていて、どこかにかくれている、という噂があることは、お前も知っているだろう。そこでだ、呉広、お前がその項燕將軍になるのだ。扶蘇と項燕將軍とが謀りあってこの蕲

県で兵を挙げたとなると、楚の人たちばかりではなく、いまの世にうらみを抱いている者が、みんなわつと立ちあがると思うのだが、どうだろう。なにしろ、みんなもう長いあいだ、秦にくるしめられつづけているんだからなあ」

項燕將軍というのは、始皇帝の二十四年、秦の將軍の王翦・蒙武おうせん もうぶの大軍にかこまれて自害した楚の名將である。その翌年、楚は秦にほろぼされた。すでに十数年前のことである。その項燕がまだ生きているという噂があるということは、項燕さえ生きていたならば必ず秦に反旗をひるがえしてくれるであろうに、という、楚の人々のせつない願望のあらわれであり、また、扶蘇のことを思うのは、二世皇帝胡亥に対する民心の離反を示すものにはかならない。

「やれるか……」

と吳広がいった。

「やってみるよりほかない」

と陳勝がいった。

「よし。やろう」

吳広は低い声で、しかし力強く、陳勝にいった。そして二人は、その節くれ立った大きな手を握りあい、うなずきあった。

2

雨はなお、降りつづいている。

宿舎の中にとじこめられている兵士たちは、みなそれぞれ故郷のわずかな土地や、小さな家や、そこに残してきた父母や妻子や、また自分自身のこれからさきについての不安を、心の底に持っていた。

彼らは、自分たちが徴発されてきたのは国境守備のためらしいということを知っているだけで、これから北方のどこへつれて行かれるのやら、いつになったら兵役を解かれて故郷に帰されるのやら、あるいは、もう帰れないものやら、まるでわからなかった。

徴発されてからこの大沢郷へくるまでのあいだは、あわただしさにまぎらわされて心の片隅に追いやられていたそれらの不安が、長雨にとじこめられてなすこともなく日を送っているうちに、次第に、濃い影になって兵士たちの心をくもらせていった。そのあらわれかたは、人それぞれによってちがった。ふさぎこむ者もあれば、やけになる者もあった。どうにもならぬことだとあきらめてしまう者もあれば、ことごとく反抗的になって荒々しくなる者もあった。

この点、陳勝と吳広にとっては、長雨はかえって天の助けともいふべきであった。二人

は兵士たちの心の底の不安をそれとなくあおりたてて、みな的心を一つに集めることにつとめた。

——おれたちはいったい、どうなるのだ。

——おれたちの家族の者は、どうして食っていくのだ。

——どうしておれたち貧乏な者ばかりが、こんな目にあわされるのだ。

——おれたちはどうすればいいのだ。

——おれたちがやつらの言いなりになっているのがいかんのだ。

兵士たちの宿舎の中には、次第に不穏な色が濃くなっていった。不満の声は次第に高まっていったが、たかをくくっている徴兵官たちにはその声はきこえず、彼らは日々、兵士たちの給与のうわまえをはねて金をためこんだり、付近の住民から軍用金をせしめたりして、のうのうと酒を飲み肉をくらって雨のやむのを待っていた。

「おい、徴兵官たちの宿舎をのぞいてみる。豪勢なもんだぞ。おれたちだって、たまには酒も飲み肉も食いたいものだ」

「そうだ。おれたちも一つ酒盛りでもして、わっとうさばらしをしようじゃないか」

ある日、気のあつた仲間が集り、それぞれ自分たちのとほしい持ち物を出しあつて住民から酒と魚を買い、ささやかな酒盛りをひらいた。

そのとき、不思議なことがおこつたのである。魚の腹の中から、細長い布切れが出てき